

第二部 パネルディスカッション
—日本語教育における実践研究とは何か—

「実践研究フォーラム」の立ち上げをめぐって
—実践研究は何をめざすか—

細川英雄（早稲田大学）

0. はじめに

【スライド1】

2004年に実践研究フォーラムを研究集会委員会として立ち上げました。そのときの一応責任者の立場にいましたので、そのことを始めに少しお話しし、その次に、実践研究とは何をめざすのかというようなことをお話しします。

1. 実践研究は何をめざすか—実践研究フォーラムの立ち上げをめぐって—

【スライド2】

実践研究フォーラム立ち上げとは何だったのか、ということと、それからフォーラムの委員会で考えたコンセプト、そして最後に、委員会の議論というよりは、今私が考えていることとして実践研究とは何かというお話をさせていただこうと思います。

2. 「実践研究フォーラム」2004の立ち上げとは何だったのか

【スライド3】

まず立ち上げとは何だったのかということ、これは学会からの要請がありました。研究集会委員会の役割としての要請です。当時、東京地区の研修が行き詰まっていた、お客さんが減り始めていたということですね。どうしてかということ、その方法に問題があったということです。偉い方を呼んでお話を聞くというスタイル、会費が高いという問題、そういうことから、どんどんと右肩下がりになっていた。これをなんとかせよというのが学会からの要請でした。つまり、集客力のある研究集会にしてほしいということでした。この行き詰まりを打開しようというのが最初に我々に与えられた使命だったわけです。

そうであるとすれば、新しいコンセプト作りをしなきゃいけないということで、基本的には、一方向的な講義でない研修にせざるを得ないだろうということから議論がはじまりました。その新しいコンセプトとは何か、という議論を委員会としてかなり頻繁に行った記憶があります。

【スライド4】

そのときの現状をもう一つお話をしておきたいと思います。

それは、「実践研究フォーラム」という名称についてです。最初は「実践フォーラム」という案も出たんですが、でもやっぱり「研究」はどうしても入れようということで「実践研究」となりました。そのときに「実践研究」という用語が何を意味するかという議論はほとんどなかったと思います。実践と研究を結ぶという意識はありましたけれども、「実践研究」という言葉がこれほど一人歩きするということは当時予想していませんでした。

なぜそういうフォーラムという名前を使った集まりにしようかとなったのは、学会の大会の中身への不満でした。つまり、学会の大会がおもしろくない、今もおもしろいかどうかは私は知りませんが（笑）、とにかくおもしろくない。なぜおもしろくないかというと、大学関係者がほとんどで、とくに大学院生の口頭発表、研究発表の場になっている。それこそ現場になんの関係もない、言語現象を取り上げて分析し、私はこう研究をしました、というような発表ばかりだった。現場を持つ先生方のこういう不満が強くありました。ですから、そういう不満を持っている人を集めて、現場の声を生かすものにしたら集客力が上がるんじゃないかと思ったのです。

もう一つ、私たちは今でこそ授業参観とか参与観察とかを今やっていますけれども、それぞれのやっている実践の中身がわからない、だから、それぞれの実践の中身を見せ合う集まりにしようというような意見も出て、それを反映させようと思いました。

こうして振り返ってみますと、「実践研究」という用語そのものは当時まだ未確定だったし、大会やいわゆる学会誌の日本語教育には、いわゆる実践の中身を示すような発表や論文はほとんどなかったと言えます。ですから、そこを切り拓こうというような意気込みを当時のメンバーは持っていたと思います。ただ、その段階でも、やっぱり実践の中身を見せて研究になるのかっていう疑問とか不安のようなものも、その新しいコンセプトを作る議論の中でかなり出ていたように思います。そして、「実践研究」というのは、日本語教育という分野の中でとらえたときに、ほんの一部なのか、半分なのか、つまり、日本語教育学と実践研究の関係はどういうところにあるのかはよくわからないということでした。これは結論を出すところまでは至らずに、とにかく中身を見せ合うような、現場の声を反映したものにしようというのが、発足当初のときの議論のエネルギーだったと言っていいと思います。

3. 実践研究フォーラムの新しいコンセプト

【スライド5】

新しいコンセプトとして、一方向的な講義形式ではないもの、というところは全員一致で了解していましたので、参加型のフォーラムをしようということはすんなり決まりました。そして、そのときに、いろいろな条件や要素については、まず応募者を選別しない、査読をやめよう、ということ全員一致で決めました。人が落ちるとか落とすとかという発想をやめ、全員丸抱えで抱え込んじゃおうと。質がいいとか悪いとかは、見た人が自ずと決める問題だろうということ。もちろん会場の制限があって、口頭発表とポスター発表とか、そういう振り分けはしましたが、基本的に応募してくださった方は全員何らかのことをやっていただく、という形にしました。ですから、誰でも参加できる形態というのをそのとき作りました。

もう一つ議論したのは、やりとりに時間をかけようということでした。これは委員会メンバーの負担にはなるし、手弁当でやっていましたので大変でしたけれども、応募をしていただいた方に、委員会からコメントをつけて、できれば発表までの間に1回か2回会うとかメールでやりとりするとかということを含めて、持続的な継続的なやりとりで発表まで持っていこうということ、委員会として心がけました。そこで考えたことは、多少おこがましいことではありますが、みんな場で育てるという発想です。みんなが集まって

発表する場、場そのものをみんなで作っていくんだ、そのことが中身を充実させていくことにつながるのだ、そのためには、なにしろ場の提供が必要だという議論をしました。フォーラムというのはもともとは広場という意味ですけど、その広場に集まってくる人のための場を作る、そこにだれでも集まってきて、何かをすればきっと何かいいことがある、そういう場を作っていこうという発想だったと思います。

もう一つは、学会からの強いお達しで、赤字は出せない、独立採算でやれ、ということでした。だから、赤字を出せない、出さないという原則を守ろうということで、紙媒体を使わずにインターネットを活用することにしました。そのころはまだ学会のHPはありましたけれども、あまり充実していなかったんですね、充実させるように我々からかなりプッシュしました。予稿集は紙媒体にしましたが、それが2、3年後にウェブ報告集になるような循環をつくりました。社会的な流れもありますが、それも精神としては現在まで引き継がれていることです。

【スライド6】

この流れをたどってみますと、まずそれぞれの方の現場の問題意識があって、それが様々な形態の応募のかたちに反映される、それに委員会のメンバーとのやりとりがつづき、それがフォーラムの発表に結びつく。当日話し合いをし、そのときにいろいろな方からいろいろな意見をもらうのでそのフィードバックを生かす、それで終わるのではなく、その一人一人が考えたことを何らかの形で記述化し、一般に向けて公開していく、この公開による成果が、各自の実践の理念やデザインにまた戻っていき、日々の実践の改善につながっていく、そして、最初の現場の問題意識のところまでつながる、つまり、こうした循環を作っていく、ということなのです。新しいコンセプトの具体的な実現方法として考えたのは、このようなことでした。

【スライド7】

この新しいコンセプトの具体的な方法というのは、私が2004年に出した『考えるための日本語』¹という本のなかの「考える教室」の形成というときに使った図と同じなんです。先ほど才田さんのお話にも、研究の手法と実践研究の手法は同じだというお話がありましたけれども、実際の教室で行っていることと、「実践研究フォーラム」でのやりとりを中心にしたことは、基本的には同じことなのではないかと、私も当時半ば気づきながらこの活動をしていました。

4. 実践研究とは何か

【スライド8】

では、実践研究とは何かということを改めて考えてみます。

あらかじめ定められた学習項目、あるいは教材を手際よく効率的に教えることが実践なのかという疑いが「実践研究フォーラム」をやっていて出てきました。とくに80年代以降の日本語教育の大前提としてきたコミュニケーション能力育成というテーマについても考

¹ 細川英雄 (2004) 「第1章 「考えるための日本語」のめざすもの 1 クラス活動の理念と設計」細川英雄・「言語文化教育研究所」スタッフ (2004) 『考えるための日本語—問題を発見・解決する総合活動型日本語教育のすすめ—』, pp. 8-42

えざるを得なくなります。私達がやっている実践そのものというのは、一体なんのためにやっているか、学習者のコミュニケーション能力を育成するためにやっているのか、本当にそうなのか、それを目的にしているのか、という疑いが出てきたわけです。

それから同時に、研究とは何か、ということです。学習項目を手際よく効率的に教える研究技法の開発が研究なのだろうかということ、それから、実践を論文化するスキルのことを研究と呼ぶのだろうか。仮説検証型と仮説生成型のお話も最初にありましたけれども、今やっている自分の実践を論文化する、あるいは研究発表として形にする、何かスキルを学ぶことが実践研究だ、というふうな方法を考えていないだろうか、という疑問がここから出てきます。そうすると、実践研究とは何かという問いが、かなり大きな課題であるということが見えてくるのです。

4-1. 「私はどのような教室をめざすのか」という問い

【スライド9】

実践研究とは何かと考えたときに、先程の現場に貢献する、現場に反映する研究という形で言うならば、なぜこの私が何を目的として、この教育実践をしているのか、という問いがやはり必要だろうと。これは実践そのものだと思うんですけども、実践そのものの中にこういう問いが必要なのではないかというように考えることができます。本当にそれはコミュニケーション力養成のためなのだろうか、という問いも出てきます。このように考えながら、実践研究を敢えて定義しようとすると、少し抽象的になりますが、自らの教育実践の理念、設計、実施を根底から問い直し、絶えず思考、主張し続けること、というようなことになるのではないかと。つまり、現在の実践を乗り越えて、自分はどんな実践をめざしていくのかという姿が見えなければ、実践研究にはなり得ないのではないかと。このように私は考えるようになったわけです。

4-2. 能力育成目的化の問題点

【スライド10】

現在の日本語教育では、コミュニケーション能力育成という実践目的の理念というのが前提になっていますけれども、個人の能力育成というのがそのまま目的化しますと、その能力育成のためには何をどうしたらいいかという、いわゆるスキルや技術の学習が中心になります。同時に、このスキルや技術の学習が中心になればなるほど、活動の内容そのものには立ち入らなくなってしまいます。

また、実践を分析してそれを学術論文化するというのが目的化すると、実践の中身そのものからどんどんどんどん遠ざかってしまう。かつてのアクションリサーチがそうだったように、問題関心が分析手法の開発に向かってしまっていて、実践の内実そのものはほとんど問われないというような問題が起こってくると考えられるのです。

4-3. 日本語教育空洞化論

【スライド11】

教える内容とは何か、つまり実践の中身ですね、一人一人がやっている実践、それは必ずしも教室とは限りませんけれども、要するに、教育、広い意味での教育実践とは何かと

いう中身を考える必要がある。もちろん、一人一人の教育観は違いますから、それは一つのものに統一されるということではありません。そういうことではなくて、異なる教育観を持つ者が相互の議論をしなければならぬのに、その実践の中身についての議論がない、つまり、空っぽだということです。空洞化しているということです。「実践研究フォーラム」は、この実践の内容に関する議論の場とプロセスを作ることだったのではないかと、今にして思うんです。そうすると、この実践の内容を考えるということ自体が、すなわち実践研究だというふうに私には思えるのです。それは日本語教育学のすべてでもある。つまり、実践研究こそ日本語教育学の根本であるし、それは一人一人が行っている実践の内容を考えることではないかと。そしてその議論の場を作っていくことが「実践研究フォーラム」に与えられた使命だったのではないかというふうに、今になって思うんです。これについては、あとでまた時間の許す限りで、ご意見をいただきたいと思います。すみません、延長しました、ありがとうございました。(会場 拍手)